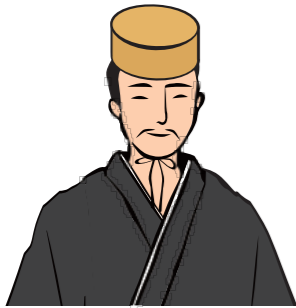


組踊の創始者 玉城 朝薫の生い立ち



1684年首里儀保で生まれました。幼いころに母と離別し、父、祖父を亡くした朝薫は、祖父の後を継ぎ、わずか8歳で土地を管理する地頭という職に就きます。

士族であった朝薫ですが、勉強だけでなく、踊りやうたといった芸能もできないと役人にはなれなかったため、芸能の稽古を続けながら勉学にも力を入れました。朝薫はその努力を認められ、21歳の時、通訳として初めて本土の方に上陸しました。

その後、何度か上陸を行い、能や狂言など様々な芸能を見て吸収していった朝薫は、本土の藩主の前で舞踊を披露できるほどにまで、芸能に精通していったのです。

1718年には踊奉行に任命され、1719年には今まで学んできた本土の芸能を参考にして創作した組踊を披露しました。朝薫が創った組踊の演目は「朝薫にはじまり、朝薫に終わる」と言わしめるほどに完成度が高く、多くの組踊作品の模範となっております。

特集 「組踊」 人々を惹きつける その魅力とは？



組踊の歴史

第二尚氏の一族が琉球王朝を治めていた時代、琉球の国王が変わることに明、または清（現代の中国）からやってくる「冊封使」※は、中国からの優れた文化や品物を運んでくるので、接待が重要な政治課題でした。

1719年第13代尚敬王の冊封※を行うにあたって、前年から踊奉行に命ぜられていた玉城朝薫は、幼いころから知識があつた本土の芸能をお手本に、琉球の芸能を加えて『二童敵討』、『執心鐘入』として宴会の場で上演しました。これが組踊の始まりとされています。その後『鉦刈子』、『女物狂』、『孝行之巻』を上演されたといわれており、これら五つの演目は玉城朝薫の創った傑作「朝薫の五組」として後世まで愛されることとなります。

その後、冊封使の接待だけでなく、士族階級の人々にも親しまれるようになり、庶民の間にも商業演劇として上演され、広まってきました。

昭和に入ると、映画のような新たな娯楽が登場し、公演が途絶えたり、戦争による資料の焼失など、度重なる危機が組踊を襲いました。しかし、後継者たちの努力により組踊は今日まで継承され、1972年には国の重要無形文化財に、2010年にはユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録されるようになりました。

組踊とは

組踊とは、台詞、舞踊、歌、で構成されており、沖縄の民話や伝説を題材とした演劇です。本土の芸能（能、狂言、歌舞伎など）や中国の芸能（京劇、崑劇など）を取り入れ、そこに琉球の芸能を加えることで、独自の文化として発展しました。

特徴としては、台詞にはリズムがあり、登場人物の性別、身分によってそれぞれ違うことや、使われる音楽はすべて琉球古典音楽であること等があげられます。また、場面によっては感情を表現するために舞踊が用いられており、他の演劇には無い、組踊独特の表現方法となっております。

←次ページ
羽衣伝説を
モチーフと
した組踊



※冊封使・冊封… 中国の皇帝が、各国の権力者の中から国王を選ぶことを「冊封」といい、皇帝の代わりに現地に行って、冊封を執り行う人を「冊封使」といいます。